

菊ちとふさがり汗出口びる色変り候故、大
きにたまげ又酔の薬のとみなみな世話いた
し被下、医者への迎にも遣し大分開き候内医
者参り丸薬飲ませ少し立内気分しつかりい
たし医者脈を取り、もふ御氣遣ひなしと
申。その内栗本より二尺五寸ばかりの大鯛
祝つて参りいわしを買ひ、取り合ひず酒を
出し、鯛の潮煮致し医者にも振舞申候。屈
は運公に願出候。生れ子湯をつかはせ掃除
相済申候。目大きく鼻筋通り中高にて鏡に
そつくりだと申候。お六よりはきりやうよ
しなり。

同年六月十四日

真吾一兩日ちと笑ひ出し、大小便共やる
度に致し、二三日はむつきさつばりよごし
不申。

同年七月十五日

明方より小僧目をさましぐずぐずと申て
お菊の胸をふみ困り、行燈つけてくれと申
故枕の引出しより火打出し火を打行燈つけ
ると大歡び笑ふやら語るやら、誠に上機嫌
や。おきく少しはよけれどもとかく力不
付、起て居りかね困り入候。

同年九月二十九日

木村に桑名咄いろいろ承り、鎌児の咄し
も承り、それより日記とところどころ、面白
い所読む。皆々あきれかへり、誠に桑名に
お出で被成も同様実に眼に見ゆる様也と
申、か様の日記は日本に稀なることなり。
四年来一日も欠けずとは御氣根の程恐れ入
りたることも也と感心せぬ者は無之候。足
立、真吾をさんざ抱く。にこにこ笑い、兄
貴に生きうつし、これも大男になると見ゆ
るなどとほめ申候。昨日真吾の手に墨をつ
けて紙に押す。

同年十月二十三日

お六明け方より熱大きにさめ正気になり
候。ほうそうらしきもの額に三つ四つ、口
の端にも三つ四つ見へ候。……お六今朝よ
りも余程数見へ候へども、目鼻の辺は一向
少く、医者も参りくれ候よし。この分では
格別のこととも有間敷由。(つづく)

(山口女子大学)

幼児の教育 第七十六卷第十一号

十一月号 © 定価二〇〇円

昭和五十二年十月二十五日 印刷

昭和五十二年十一月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京九一九六四〇番

© 本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。